

台湾と私

阿川 弘之 ● 会長・作家



阿川会長（第1回総会）

昭和十七年の暮、私は台湾高雄州東港の、海軍航空隊の中で、海軍士官（学徒出身の予備士官）になる為の基礎教育を受けてゐた。

ある日、東港の町の小学生たちが先生に引率されて、「海軍さん慰問」にやつて来た。年末の学芸会みたいなもので、色んな唱歌や踊りを披露してくれるのだが、特によかつたのは「一茶の小父さん」——、陳氏某、林氏某と胸に名札をつけた可愛い女生徒の一と組が、江戸時代の童わらべになつて、俳人一茶に、小父さんのくには何処かと訊ねる。

「はいはい私のおくにはのう

信州信濃の山奥の

そのまた奥の一軒家」

そこで雀とお話をしてたのぢやと、一茶が答へる。冬も暑い南台湾で、きびしい訓練に明

け暮れてゐる私ども五百数十人の同期生、この歌を聞きながら雪の信州を思ひ出して、みんなしんみりさせられた。

それから三十余年の歳月が過ぎ、戦後初めて台湾旅行の機会に恵まれた私は、台湾人の友人に案内してもらつて、なつかしの東港を訪ねて行つた。あの、色の浅黒い可愛い女生徒たちも、もう中年の小母さんになつてゐるはずである。誰か、当時のことを語り合へる小母さんに会つてみたかつた。

突然の要望で、それらしき人は中々見つからなかつたが、偶然、東港小学校の昔の校長先生と出くはした。

「さうか。あんた東港航空隊にゐたか。そりやなつかしいだろ。今夜東港に泊つて、名物の蟹食べて行け。いつ頃東港にゐたか」

足の少し不自由な老校長先生が仰有る。当時台湾は、蔣政権下の中華民国、失礼の無いやうにと、頭の中で勘定して、

「民国三十一年の十月から三十二年の四月まで……」

言ひかけた途端、思ひもかけぬ一と言が返つて来た。

「年号は昭和で言はないと分らないよ」

びつくりすると同時に、私は涙ぐみさうになつた。

かねて、台湾には日本統治時代、日本語教育のよき一面を、ちゃんと認めて、日本をなつかしむ人たちが大勢あると聞いてゐたが、ほんたうにさうなんだなと思つた。実際、東港周辺だけに限つても、東港駅の駅長や、東港線の列車の車掌や、私が日本人旅行者と知つて、なつかしげに声を掛けてくれる人が、老校長のほかに何人もゐた。

ただし、その「大勢」の中から、十年後、ちやうど年号の「昭和」が終る頃、李登輝といふ

傑出した政治家があらはれ、台湾の総統に就任するとは、想像もしてゐなかつた。台湾生れ台湾育ちの新しい総統は、新渡戸稲造の「武士道」を高く評価し、日本人よ、武士道精神を忘れるな、もう少し自信を持ちなさいと、自信喪失症の私たちを励ましてくれる人でもあつた。個人的に李先生と接触が生じらずと前の話だが、ある会合の席上、

「今、アジアで一番立派なステイツマンぢやないかね」

私が言つたら、一人にやりとするのがゐた。

「アジアで？ 世界でと、言ひ直していただきたいですなあ」

それからさらに十数年の歳月が経ち、その総統が前総統になつて、現在やりたいことの一つは、俳聖芭蕉の「奥の細道」をたどる旅、これはよく知られてゐる事実だが、私の方の、台湾をなつかしむ気持の、元の元のところにも、実は前述の通り、俳人一茶がからんでゐるといふ奇妙な因縁があるのですよ。